

百折不撓のトリップループ

恒例行事

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人は死を恐れる。

死は平等だ。どんな生き物にも平等に、どこまでも等しく与えられる終わり。

では、死さない——死んでも終わらない奴は、どうやって終わればいいのだろうか。

死が欲しい。

終わりが欲しい。

死んで苦しみから解放されるその時を、俺は諦めない。

目次

七話	六話	五話	四話	三話	二話	一話
53	44	35	25	18	10	1

一話

「……………どこだっこ」

思わず言葉が出た。

周りを見渡しても、何も無い。何も無いと言うのは語弊があるから訂正する、『人工物が無い』。

状況を振り返ろう。

名前、ひがみやこう日上八光。

男、年齢は二十四。高卒で田舎を出てから全国区の会社でサービスマンをやってる。今は就業を終えて帰宅途中、山手線の電車に揺られている最中……だった筈だ。

何でだ？ どこだっこ。

コンクリートはおろか、人の手が加わった形跡の無い場所だ。具体的に言えば平原？ 荒野？ 草木はあるから廃れた、滅んだ場所って感じじゃあないが……。

「訳が、わからん……夢か？」

取り敢えず腕を軽く抓ってみるが、痛いだけで何も起きない。そもそも夢だとしてもこんなな意識を強く持ったことが無い。取り敢えずスマホを取り出して時間を確認し、現在位置を特定できるか試す。

結果はまあ、当然ダメ。

時間は二十時半、いつもなら帰宅し家で飯を食っている頃だ。しかも圏外である。

なんだこの状況、どういう事だ？ ドツキリ？ そんなまさか。こんな手間暇かけて昏睡させる誘拐とか聞いたこと無いし、あるとは思えない。

現実的じゃなさすぎる。俺の知り合いにそんな巧妙な事をする人間は居ないし、なによりする得が無い。変なユーチューバーの企画にでも巻き込まれた……？ いや、犯罪だろ。

ああー、状況的にはアレだ。

最近よく広告とかで見る『サイバル』系の状況だこれ。そんなくだらない考えが頭の中をよぎり、緊張感が霧散する。

唐突すぎるのだ。

さつきまで電車に乗っていて、その記憶は残っている。なんなら座って寝ようとしていたと証言できる。それが目を覚ました、というより気が付いたらこんな平原の真ん中だ。

これで緊張感を持ってと言う方が無理がある。

溜息を一度吐いてから、改めて周りを見渡す。

幾つか大きな山が存在し中には雲を貫く様な高さを誇るモノもある。木はまばらに生え揃い、沢山生えてる場所も見える。地質学とか、そういうのに明るくないから気候の判断は出来ない。

ある程度の知識を備えたサバイバルに慣れた人間は地域の特色を理解し、生えている植物や地面の様子からどういう風に気候が変化するかわかるそうだ。

そんなの現代日本で生きる上で必要無かつたし、俺は仕事と趣味を行ったり来たりするだけの典型的な社会人だった。そうして趣味にサバイバルは含まれていなかった。ただそれだけの話だ。

「なんて、今は何の役にも立たない考察だな」

取り敢えずその場に腰を下ろして荷物を確認する。

貨幣が通用する場所かはわからんが、とりあえず財布は無事だ。ドツキリだった場合も問題ない。家の鍵、ちよつとした機密ですらない書類。最低限買った炭酸水があるくらいか。あとは……多少の怪我をカバーできる絆創膏？

最低限の道具だが、こういう時どうすればいいもんか。

こうやって、まあ、言ってしまうえば『トリップ』する状況は創作においてよくある事だ。一つ違ふとすれば彼らは選ばれた主人公であり俺はただの凡人だという事。

泣き言を言っている訳にも行かないし、なんとなく安全そうな場所へ向かうとしよう。

ああ、野生動物がいる場合どうすればいいんだろうか？ マーキングで縄張り強調？ そんな事したらデカイ熊みたいな生き物が居た時速攻殺される気がする。

「まあ考えても仕方ないよな」

そう、仕方ない。

全部仕方ないのだ、人生と言うモノは。
鞆を持って立ち上がる。

火の起こし方も知らない、食料の確保も出来ない、身の安全は保障できない。そんな状況でのサバイバルなのに、不思議と不安は抱かなかった。どこか夢のように感じているからだろうか？

取り敢えずは今残っている炭酸水、これが命綱になる。

ペットボトルをうまく切ったりなんかして加工するような動画も見たことあるが、焼け石に水だろう。見様見真似で何かを成せるほど自分は器用ではないのだ。

良くいる主人公のように医学の知識をつけておけば良かったと内心愚痴りつつちやぶちやぶとペットボトルを揺らした。

◇

「……暑い」

変な草原？ に謎の転移っぽい現象に遭遇して一時間程度。既にスマホの時間は頼りにならないことを理解し、とりあえず木の陰に隠れる事にした。

直射日光を受けたまま歩くのは体力の消耗が激しすぎる。日本国首都東京のコンクリートジャングルですら蒸し暑く不愉快だったのだ。こんなガチ自然の中命の管理も出来ないのに歩いていればそれは消耗するだろう。

体力がある訳でもなく、仕事を終えてそのままこの状況だ。

「日差しがあるって事は、太陽？ 近いような気もするけどなあ」
現状を何も打破する事はないただの気休め考察を進める。何となく考え事をしている時、楽になるんだ。今この状況だからとかそういう訳じゃ無い、元々気質がそうなんだ。

特になんにも建設的ではない考察をして無駄に雑学を得たようなつもりになる。

これは俺の中でかなり大事な事だった。仕事でやる気が出ないときも、通勤中満員電車で押されてるときも。将来を考えて不安になるくらいだったら俺はこうしていた。

現実逃避？

上等じゃないか。現実には常に向き合わなきゃいけないものでもない。

楽でいい。楽でいいじゃないか。

なんで自分から苦労しなきゃいけないんだ。誰がそうやって決めたんだ、俺はそんな事決めてないぞ。

「つてうわー！」

そんな事を考えていれば、モゾモゾ首筋がこそばゆい。

触って確かめてみれば見たこともない蟻のような生物がよじ登っていた。

流星に蟲が身体を這っていれば気持ち悪いし不愉快だ。手で払いのけて立ち上がり、木を眺める。

「……蟻かなあ。あー、わかったところでなんにもならないけどなー」
蟲を不用意に刺激するべきではない、という事は理解してるので触れずにその場から離れる。炎天下ではあるがこっちは文明の利器がある。鞆を頭の上、日差しを遮るようにして歩き出す。

目的地は正直な所ない。

一番理想的なのは水場なのだが、その水が安全かどうかは理解してない。適当に砂とか岩とかの層作ってる過すれば飲めるだろうと思ってる。それに水場は他の生物にとっても大切な場所で、既に大きな生物が縄張りにしてる可能性の方が高いのだ。

「ま、考えても仕方ない」

そう、仕方ない。

俺はプロじゃないんだ。適当に生きれるまで生きて、死ぬなら死ぬ。

そう考えると胸の奥がズキンと痛むような、哀しくなるような感情を覚えるけれど……仕方ない。

そうやって小休止取りながら歩いて、やがて陽が傾き始めた頃。

改めて太陽のような光源が近いと思いつつながら適当に考察している
と動物の足跡を見つけた。正確には足跡のようなモノ、ではあるが。

形状は……馬では無さそう。

ていうか人に近いな。人の足跡とか子供の頃の泥遊びのときくら
いしか見た事ないけど。

大きさは俺と同じか、それより大きい。

この時点でわかった情報としては、おおよそ人型のような生物が生
息していてなおかつ足跡を残しても大丈夫な程度の治安という事だ。
それだけする知能がないだけの可能性も否めないが、最悪を想定する
ならこんな感じか？

靴では無い。というか、俺が歩いた道に足跡は付いてないから相当
重いのか。

「夢なら醒めて欲しいわ」

理解できない現状に、思わず言葉が漏れる。

訳が分からん。取り敢えず動いているが、動いているだけだ。何一
つ大切な事はしていないだろう。寝て起きたら元に戻ってるんじや
ないかとか、そんな考えが脳裏をよぎった。

ここから元の生活に復帰できる可能性は、低く見積もろうか。死ぬ
なんて言葉がこんなに身近になるとは思わなかった。事故とかで死
ぬならまだしも、こんなよくわからない状況で死ぬ。

理不尽な人生だなあ。

「まあでも、そんなモンか」

適当に生きてきたツケだ。諦めよう。諦めて、少しでもショックを
軽減するんだ。

そうやって生きて来たんだから、最期もそう終わるのがらしいだろ
？

足跡の続く方へ向かうかどうか、それだけ決めよう。

財布の中に入っていた百円玉を取り出して親指の上に乗せる。コ
イントスで人生を左右する選択をするのなんて、如何にも主人公みた
いじゃないか。

表が出れば、足跡を追う。

裏が出れば、足跡を追わない。
ドツキリだのそんな可能性は捨てよう。

俺はここで誰に知られる事も無く死ぬ。そう考えて行動すれば気が楽になるさ。

指で弾いた硬貨がゆつくりと回る。勿論目視で追える筈も無く、手の甲でなんとか受け止めて逆の手で蓋をする。

コイントスなんて練習したこと無いけど、意外と様になってたんじゃないか？

何の思いも特に抱かずに、硬貨を確認した。

——表。

さてと、何が出るんだろうか。

問答無用で殺しに来るような野生動物か、俺と同じような境遇の間か。それとも、見たことのないような怪物か。

苦しんで死にたくはないなあ。一息で死にたい。

クマとか居たらどうしようか。

くだらない事を考えながら足を前に進める。

その昔、人が野生動物に対抗するために武器が作られた。鱗も毛皮も爪も牙もない俺達人類は、基本的に野生の生物に勝てない。いとも容易く命を奪われる程度の存在でしかないのだ。

じゃあ、今の俺は？

武器は無い。

知恵もない。

生きて行こうという意思もそう多くはない。

現代社会で普通に生きていた人間がこんな目にあって、しつかりとした活力を得られる方がおかしいだろう。絶望で胸が一杯だよ。

でも苦しむのもイヤだ。だから、心の中で正当化を図り言い訳ばかりしている。

逆に考えよう。

もう誰にも会う事がないのなら、俺は何も考えなくていいんだ。

育ててくれた親への恩返しとか、親戚との付き合いとか、職場の間関係とか、将来への不安とか。そういうの全部放り投げちゃっていい

い。余命宣告されたら誰だって少しは投げやりになる。今の俺はそういう状態だ。

開き直るとも言う。

そうして歩いておよそ五分程度たった頃。

足跡が途切れ、俺はいつの間にか森の中に迷い込んでいた。

仮に生存を願うなら最悪な展開だが、もうどうでもいい。俺と同じような人間が居たならラッキー、野生動物に喰われるならそこまでせめて一息で殺してくれと願うばかりだ。

もう、冷静じゃないんだろう。最初から、この現状に連れてこられた時点で。

追うのを諦めてその場に座り込む。

大分少なくなつた炭酸水を流し込んで、ペットボトルを鞆に仕舞う。これで最後の生命線が潰えたなどどこか他人事のように認識した。

——ポタ、ポタ……と、座り込んだ俺に水滴の様なモノが落ちてくる。

ああ、意外とどうにかなるもんだな。そう考えながら上を見て——

そこに見えたのは、枝に絡まる様に、それでいて木そのものに根を張る様に張り付く異形の怪物だった。

その瞬間、怪物は俺に向かって飛び掛かって来た。

無論反応できる筈も無く、抵抗にならない抵抗をして身をよじるも抑えつけられる。

甚振るような残忍さを見せず、怪物は俺の腕を手に取り——そのまま力任せに引き千切った。

「——づつ……あゝあゝ!?!」

動悸がうるさいくらいに響いてる。千切れた箇所が、口に表せない痛みを訴えてくる。

両腕の肩から先が無くなって、痛みの反射でじたばた暴れるが怪物は全く気にもせず。そのまま今度は俺の右足にかぶりついた。

牙が喰いこみ、肉が弾ける感覚。液体が溢れ出て命が流れ出ていく。

——ブチブチイツ!!

「がああああ、あ、あ、あ、あ!!?」

痛みで思考が定まらない。

やばい、死ぬ、死ぬ、殺される。

わかっていた事実なのに、いまこの瞬間になって急に震えてきた。それが果たして痛みからなのか恐怖からなのか、俺にはわからない。

ただ一つ確かなのは、最悪な死に方をするという事だけ。

肉が食いちぎられた部分から骨が露出する。

元は白かったソレは血液と肉に塗れ、異色に染まっている。それを認識して更に激痛が脳に訴えかけてくる。

躊躇うことなく、今度は左脚を破壊するように手のような部位で千切り始めた。

昆虫の手足を腕ぐのように、四肢が無くなり激痛にさらされる中少しずつ意識が削れていく。

視界が明滅している。

腕の感覚が無いのにずっと痛みだけが残り、足先でまた激痛が奔った。もう声を出す体力も残っていないから、自分がどんな状況に陥っているのか想像できない。

ああ、終わる。終わるんだ、俺の人生。全部全部ここで終わりだ。やっぱり努力なんてする必要無かった。いう事を聞いていい子で居る必要も無かった。

社会なんてモノに身を捧げても、こんな終わり方をする。生きたまま喰われて、終わるなんて、想像も、出来な——……………

「……………え?」

思わず、言葉が漏れた。

そして次の瞬間、両腕を激痛が襲う。

そうだ、俺の両腕千切られて喰われて、足も喰われて、俺は死んだんじゃない？

慌てて確認したが両腕は健在。足も無傷でついさっきまでの形を保っていた。

「……………どうなってる？」

周囲を見渡せば、どこかでみた風景だ。

平原に、所々生えている木。

一つ、答えが浮かんだ。

まさか、なんて思いつつ急いで鞆を漁る。目的のモノは一つ、俺が飲み干した炭酸水だ。

手に取って中身を確認する。

「……………減って、ない」

少しずつ飲んで最後は全部飲み切ったはずなのに、残っている。

確かに全部飲んだはずなんだ。

嘘だろう、そんな言葉を飲み込む。

嘘じゃない。俺はさつき死んだし炭酸水も飲み切った。あの見た

光景や体験は偽物じゃない。

現実は小説より奇なり——なんて言葉がよぎる。

「は、はは……………冗談じゃないぞ」

ああ、確かに前に進んだ。死にはしたけど状況は変わったよ。

何も出来ない諦めの状態から、何かしなければ終わらない地獄にな。

最悪だ。

この状況で一番の救いが絶たれてしまった。死という全てを終わらせる絶対のモノが。

「……………巻き戻りとか、そんなの物語だけにしてくれよ」

未だ痛む両腕を摩りながら、空を見る。

太陽のような光源が、燦々と大地を照らしていた。

二話

取り敢えず、情報を纏める。

未だに幻痛を訴えてくる両腕を少し労わりながら鞆の中を漁り、メモ帳を取り出す。スマホでメモすればいいだろと思いついたけど、メモ帳がこんな形で役に立つとは、やはり色々手に取っておくべきだと実感した。

まず一番大事な項目から。

『死んだけど死んでいない』、これだ。

記憶の中にある最後の光景は、俺の身体を容易に抑えつけて身体を生で喰ってきた怪物の顔。人のようでない、何と言えはいいか……表すのが難しい。

考えるだけでぶると身体が震えるから正直考えたくもないんだが、こんな状況だ。考えるしか出来る事が無い。

仮の名前で安直だが『怪物』と名付けよう。

その怪物に喰われ、俺は死んだ。食いちぎられた箇所から流れ出ていく血液の感覚は、暫く忘れられそうにない。

……無意識に脚を摩っていた。

気持ち悪いな、どうにも。あのまま死ねれば楽だった、というより苦しまなくて済んだんだが。

話を戻そう。

死んだけど死んでない、死んでもこの場所に戻ってくる。

一度しか死んでいないが、これは確定事項なのだろうか？

流星に何度も死にたくない。

自分が想定していたより死ぬときの感覚は不愉快じゃ無かったが、二度目からは多分死ぬほど不愉快だろう。あの苦しみの中で意識が薄まり、苦しさで痛みの奔流から抜け出せるから死に安堵した部分もある。

それが抜け出せないのが確定していたら救いでも何でもない。

ただ失敗を表し、再度始まるリスタートの合図だ。

死だのなんだの、そういう概念を考えるのは宗教とかの仕事だろ

う。俺が考えるべきことじゃない。

ボールペンとメモ帳を地面に置き、手を首に当てる。包み込むように、首の最も太い箇所を掴む様に。

両手で覆い思い切り力を籠める。

「あ……がッ……！」

喉に焼けたような刺激が奔る。むず痒いような痛いような、それでも手を緩める事はなく力を入れ続ける。

苦しみでその場で黙ってしていられなくなり、身をよじる。

吐きそうだ。

胃の中のものが全てが流れ出ていくような感覚だが、何も口から出ない。出ているのは声にもならない呻き声と空気だけ。

「……おえッ！」

ああ、苦しい。

怖い、痛い、苦しい苦しい苦しい！

「ゲホゲホと咳き込んで、手を放してしまった。」

嫌だ。死にたくない。いや、死んでもいい。死なないのだから。

苦しみたたくない。辛い、痛い、苦しい。

「……ははっ」

ああ、クソつたれ。涙が出てくる。

泣いたのなんていつ以来だよ、高校の頃好きな子に彼氏が出来た時？

そんなどうでもいい事を思い出す程度には苦しかった。駄目だ、手軽に自殺できる道具がないから確かめようがない。

いやだなあ、諦めたいなあ。

何で死ねないんだろ。

もう心はバキバキだよ。死ねば全部終わると思ってたのに、全然終わらない。

寧ろ始まりじゃないか。

くそ、くそクソクソクソくそ……。

はー、やってられん。

空を仰ぐように、呆けて見つめる。

やってられんからと言って、これ以上ここに居る意味もない。

簡単に切り替え何て出来ない。前向きに行こうなんてやれるかよ。でも終わらないと理解したし、俺じゃあ自分で決着をつける事すら出来ない。

ならば、前に進むしかない。少しでも情報をかき集めて生き残つて、死ぬ。

そうだ。

死ぬないならば死ぬために頑張ろう。

矛盾してるかもしれないが、それしかない。俺は終わりを求めていて、でもそれは簡単に実現しない。少なくとも喰われて身を失う程度じゃ実現しないことがわかった。

ならば試そう。

苦しんで苦しんで辛くて涙が出る現実でも、目を逸らせないのでから。

どれだけ折れたって仕方ない。折れて折れてズタボロになっても終わらないんだから、いいだろちよつくらい折れても。

そうと決まれば話は早い。

死ぬ苦しみも、いつか死ぬば無くなるさ。

取り敢えずは飯を食って、水を確保して、あの怪物には出会わないように細々と生きて行こう。

時間は沢山ある。

文字通り、『死ぬほどに』。

◇

死を求めて、ああ……なんと表現するべきか。

「三周目」、とでも記しておく。これが一番正しいような気がする。

一周目は怪物に喰われて死んだ。生きたまま喰われる痛みと苦しみは味わったから、もう味わいたくない。

だから二周目は徹底して怪物に近づかないようにした。

活動圏内を周囲五十メートル程度に限定して、とにかくなんでも口に放り込んだ。そこら辺に生えてる草の味は覚えたし、食べても問題ない食料の確保は出来た。

栄養があるかは知らん。虫よりは美味しいしマシだった。

木、そのものにかぶりつきもした。木の根っこ？ だか新芽は食えるみたいな話を聞いたことがあったので掘り起こしてみたが……それに労力を割きすぎてダウン。完全に動けなくなって二週目は終わった。

自分の身体の限界はなんとなく理解したから、メモ帳に回数だけ書き込んでいく。

それじゃあ次はどうしようか。思っていたより衰弱死が辛くなかったから、出来るだけこの形で死ぬのを選んでいきたい。餓死にも近いけど、喰われるよりマシだった。

昔読んだ小説に、ループするジャンルの作品があった。

それは外敵との戦闘だったり、誰かを救うために無限に繰り返したりする話だった。

目的がはつきりしているしわかりやすい。誰が見たって理解できるから俺はその話が好きだった。

でも、こうやって自分が当事者になると……クソつたれだ。

突如謎の場所に転移。目的不明、生き残る事すら不透明。その上見たこともない怪物がいるしソイツは肉食ときた。

そんな状況でどう抗えばいいのだろうか？

ああ、やめだやめ。メンタルが早くも折れそうになってる。

さつきまでは水浴びすら満足に出来なかつたから不愉快を極めていたが、死んで周回を重ねた事で元に戻っている。リセットできると、簡単に考えよう。深く考えようとするから俺は駄目なんだ。それを解決する知能も知識も持っていないのに無駄に考えようとするから。

とにかく手を出すんだよ、色々と。

取り敢えず、寝床の心配は要らない。

野晒しではあるが一週間程度は生き延びれた。本当に生命を維持

してただけだが。

周囲の探索と行こうか。あの怪物のような奴に出会ったら、どうしようか。

……その事を考えるだけで気持ち悪くなる。またあんな奴に遭遇したら死ぬ。ただ死ぬだけじゃなく、最低の苦しみの中で死ぬ。

武器は、ない。

仮にあったとしてもそれを振るうセンスは無い。我武者羅にやっ
ていこう。

知恵や知識の代わりに、俺は経験だ。賢者にはなれない。

軽くスタート地点に目印、折った枝とかを集めて重ねておく。

無駄に労力を割いては死ぬ。それがわかったただけ二周目は収穫があつたな。

東西南北。その方角が合っているかどうかはわからんが、とりあえず暫定で決めた。

一周目は何も考えずに向かっていったが、場所では言えば南の方。じゃあ今度は北に行く事にしようか。トライ&エラーなんて言葉がこれほど似合う状況だ、しようがない。

「そうだ、仕方ない、仕方ない」

自分に言い聞かせながら歩き出す。

ああ、またアイツに出会ったらどうしよう。嫌だ、もう喰われて死にたくない。歩いてる筈なのに足が震えてる気がする。

怖いなあ、嫌だ。一思いに殺してくれないんだ。一撃で頭を潰してくれば痛みを理解しなくて済むのになあ。

こんなにも未知が恐ろしいなんて思ってなかった。全知全能の間は未知を求めやすいが、俺はそうは思えないよ。確実に結果が分かりきってる方がいい。不安も恐怖も無く生きて行けるならそれ以外求めるモンないだろ。

込み上げてくる嘔吐感に、抵抗する事も無くその場に蹲り吐き出す。

元々ロクに入っていない胃の中から貴重なエネルギーと共に外に流れ出ていく。ああもう、トラウマになりつつある。

いつまで続くんだ。いつになったら死ぬるんだ。終われるんだ。生き地獄だ。人間生きてれば幸せ？ 馬鹿を言うな、こんなのクソだ。

絶望しかないけど、絶望しても意味がないからやるんだ。

「ふう、ふー……」

呼吸を整えて、食べても問題なかった草を口に放り込む。

オーケー、切り替えていこう。殺せばいい。あの怪物を殺せばいいんだ。アイツに出会ったら殺せば、俺は苦しまなくて済む。

内臓は弱い筈だ。木の枝でも何でも突き刺して暴れさせて、ひたすら殺せばいい。

よし、よし。そうだ、

殺そう。全部全部全部殺そう。

立ち上がって口を適当にふき取り、一步踏み込む。

喧嘩なんてしたこと無い。人を全力で殴ったことなんて子供のころ以来一度もないぞ。

「大丈夫大丈夫、やれるさきつと」

自己暗示を繰り返す。

その果てに、俺が求めるモノがある筈なんだ。死すらも乗り越えた、本当の終わりが。

そうやって考えながら歩いて、およそ三十分。

一周目の時は日差しが強さに一度木陰に移動していたが、こっち側も変わらないようだ。距離が離れすぎてるわけでもないし当然と言えば当然。

改めて一度木陰に移動し、ついでにエネルギー源になるモノを探す。

木の種類は流石に覚えてないが少しくらい虫が居る筈だ。毒の有無は判断できない。色が派手じやなければ食べても大丈夫だろう。

見つけたのは小さな蜘蛛と小さな蟻。

……腹が減ってる訳じゃ無いが、少しでもいい。少しでも動ける分を増やすんだ。

どうせ死ぬ死なないとしても、一周を長くするに越したことは無い。何度も

初めからやり直しなんてそんな面倒くさい事してられるか。

こんな繰り返し返しの力じゃなくて、もつと上辺だけの借り物だけくれれば良かったのに。

——ないものねだりは止そう。無意味だし、何よりも非生産的だ。そういう訳で、蟻を見つけた。

最初俺の首筋にくっついていた奴と同じ種類であつてるだろうか？ 同じでも同じじゃなくてもどうでもいいが、とりあえず口に放り込む。

爆発するような酸味の刺激に、仄かな甘みが後味でやってくる。味はぶつちやけいいんだけど食感が悪すぎてクソだ。

硬くてゴロゴロした本体、ブチブチ千切れて口の中で自由に泳ぎ回る足。

コンビニのおにぎりが愛おしくなる。

でも、食料にはなる。ちよつとしか栄養が無くても食える。毒だつたとしたら、次食べなければいい。

サバイバルのようでもサバイバルじゃない今の状況にはうつつだ。

十匹程胃の中に運んで空腹感が更に刺激されたのを感じながら、木陰から身を出す。

夜移動すればいいと思うかもしれないが、そうはいかない。

夜は真っ暗なんだ。星なんて見えないし、明かりが一つも存在してない。だから今比較的安全に移動できる昼に移動してる。

それに、あの怪物が夜目が効かないとは限らない。

完全に不利な状況を招き入れるよりかはマシだ。

そしてちよくちよく虫を口に放り込んでその不快感に顔を顰めながら歩いて、一時間。

雨でも降つたのか、ぬかるんだ地面。俺が歩いても痕が残る程度には緩くなった土壌。

その場所を見て、俺は止まった。

地面一杯に、足跡。

それも俺より大きく、素足の形で残されたモノ。

「……そーいうパターンね」

南にも怪物、目の前の森にも怪物。

この感じだと西にも東にも居るだろうな。全方位囲まれた場所だ
と思っただ方が良さそうだ。クソが、最悪だ。

本当に最悪を想定していかねければならない。ずっとずっと、この
先もずっとそうだろう。

「詰んでんなあ、オイ」

思わずため息を吐きながら、その場に立ち尽くした。

三話

——苦しい。

噛みつかれて出血した。押さえつけられて骨が折れた。殴られて声も出せなくなった。

——痛い。

身体を引き千切られた。指を一本ずつ折られて、千切られて、骨がまるごと引き抜かれた。それを笑いながら目の前で食べられた。

——死にたい。

喰われた。食べられた。千切られた。折られた。腕がれた。腕を、足を、指を、首を、内臓を、生殖器を、心臓を。生きたまま、死んでも、喰われて喰われて喰われた。

逃げて走り回った。どこにもいない場所を探して足を動かした。誰も、何も俺以外の存在が居ない空間を求めて。

でも駄目だった。

どこに行っても『怪物』が居た。

森を住処に、木を住処に、平原を住処に、山を住処に。生息地域なんて言葉が通用しない程に、まるで人間みたいに色んな場所で生きていた。

餌としか思われなかったのか、それとも他の意図があったのか。

一撃で俺の首を押し折る怪物もいれば、弄ぶように末端から削っていく怪物も居た。

五周目あたりまで、全身が震えっぱなしだった。すぐにでも逃げ出したかった。

膝が噛って、走る事すらできなかった。怖くて怖くて堪らなかった。あの痛みと苦しみに耐えられる気がしなかった。元に戻るたびに嘔吐し涙と涎、いろんな液体で顔がぐちゃぐちゃになった。

その刺激臭がまた不愉快で、たまらず吐いた。

どれだけ戻っても、擦っても、感覚が消えない。

千切れて潰れて折れて喰われて、あの削り取られていく感覚が抜けない。指が腕が肩が、全部全部全部。内臓が存在する、存在しないの

感覚を理解できてしまった。気持ちが悪い。

首を絞めて自殺しようとした。力が足りなくて死ねなかった。死んで全部リセットすればこの不快感は消えると思った。

服を脱いで木の枝に括り付けて首を吊った。

苦しくて吐きそうだったけど、喰われるよりはマシだった。

十週目くらいで震えが気にならなくなった。

数を数えるのが面倒になったから、数字を書くのをやめた。首を吊って自殺してから自分で死ぬのに踏ん切りがついたような気がして、ボールペンで自分の喉を突き刺して死のうとした。気持ち悪さと微量な出血にイラついてとにかく何度も刺した。

痛くて気持ち悪くて辛かったからもうやることはない。けどボールペンで人が殺せることがわかった。

怪物を殺す。

殺してやる。殺されるだけの現状から変えてやる。殺す、殺す殺す殺す殺す。

殴つても殺す。噛みついてでも殺す。俺にやってきた苦しみ全部与えて殺す。何度殺されても元に戻って殺す。ムカつく。殺す。

腹が煮えくり返る、という言葉をこれでもかという程に実感した。

死なない、苦しいだけだ。

死なない、辛いだだけだ。

ならばどうするか。

殺して俺の安全を確保する。俺が先に進むための全てを奪いとる。

水も食料も文化も文明も、全部全部俺が奪う。

自分を殺せるんだから、相手を殺せない理由がない。

諦めてもらおう。

俺の平穩のために、俺の終わりのために。奴らに先に終わ^死ら^んで^らう。

殺そうと意思を固めてから何周回か繰り返した。

全体像を観察するために、奴らの生息地域を固めた。南の方に一体で居た奴をまず殺す事にして周辺を探索、数回遭遇して喰われたがこの個体は遊ぶこと無く殺してくるからそこまで重要じゃない。

結果として縄張りという程明確に定めていない事がわかった。数日同じ場所に居ても来なかったり、たまたま来たりした。周回毎に行動が変わっているのが気になったがどうでもいいと判断した。

ただ、奴を追い掛け回しているところちょっととした湖を見つけた。

俺が飲んでも大丈夫かは知らないけど殺した暁には飲もうと思う。

一番の問題は、現状だと奴を殺す手立てがないくらいだ。いや、殺すには殺せるとは思うが……何分試行回数が足りない。

巻き戻ったら数日前まで戻るのがもどかしい。ほんの数瞬間に戻ってくればいいのに。

もしそうだったら、最初の時点で詰んでたな。

覚悟するまでここまで時間がかかった。それでも不完全だし足りない。

落ち着け、まだ何にも達成してない。殺してない。

人のような形をしつつ、歪な体をした化け物共。

理性がないようにしか見えないのに特有のルールの範疇で動いているコイツらが気持ち悪くてしょうがない。

ああ、気持ち悪い。

観察もそこそこに、挑むことにした。

まずは正面からやる方法がないか探る。駄目なら罫を作る。少しでも知恵を絞って殺す。

初動でぶん殴られて行動不能になったのが数回、それを避けられるようになってからが本番だった。

殴った手が折れた。蹴った足が折れた。素人丸出しの力の入れ方では駄目だったようで、その直後に殺された。

力の入れ方を工夫した。

ただ真っ直ぐぶん殴るんじゃなくて緩急をつけて、隙を突く様な形にして、硬い部位や骨の部位ではなく柔らかい部分を目指した。

最初は上手く行かなかったけど順調に上手くなった。

回数は忘れた。

怪物の身体に生殖器や剥き出しの内臓は見つけれなかった。

辛うじて目とか顔の器官を狙えるくらいだった。

排泄孔も見えなかった。

本当に謎の生体だが、それ以上に俺が受けた苦しみを完全に返せない事に苛立った。

そうして、挑戦し続けて幾ばくか。

死んで、前回分の経験を頭の中で反芻しつつ移動を開始する。

直射日光を避ける為に少し木陰を挟んでいく。こうしなければ後半無駄に消耗した体力が足りなくなってしまう。動けなくなってしまう。死ぬ事が判明した。だから気を付ける。

唯一と言える武器のボールペンだが、これが役に立つ。

残念な事に殴打だけで殺せる相手では無かった。傷をつけるのにどうしても鋭利な道具が必要だった。だから利用した。俺の身体程柔らかくないが柔らかい部分は見つけたから問題ない。

憎しみを籠めて全身形が無くなるほどにぶん殴って殺してやりた
い。

歩き続けて小一時間、奴の生息地域へと到着する。

ここからは少し慎重に行く。

俺の痕跡をあえて残すために草花を踏みしめる。靴跡がビツシリ残ったところでその場から木に向かって跳ぶ。

最初は木登りすらうまく行かなかったが、数えきれないほどやり直して慣れた。

微妙な取っ掛かりに足を掛け指を掛け、音を出さないように登る。木はそんなに高くないが葉の量がとても多く、身体を隠すのに適している。

このまま、奴が現れるまで待つ。ひたすらに、俺が死ぬまで。

周回毎に行動が違う事によって起きるデメリットがこれだった。

俺がどれだけ予測を立てても、奴の行動はある一定のパターンをぐるぐる回っている。だから仕方ない、死んでも元に戻る事を利用してそのパターンを絞って——ここが一番勝率が高いと踏んだ。

待ち続けて、大体数時間。

身体の関節が気持ち悪いくらい凝っている感覚がするけどこんな障害にもならない。苦しくも痛くもないんだ。

そうして現れ、俺の痕跡を見て訝しんでいる怪物。

全身が真っ白で、不気味なフォームをしたソイツ目掛けて——思いつきり、飛び込んだ。

音の以上に気が付いた怪物がこつちを認識する。

それでいい。それがいい。

俺の方を見てわざわざ弱点を晒してくれるのは好都合なんだ。

手にしたボールペンを思いつきり振りかぶり怪物の——目玉めがけて振り下ろす。

俺の力だけで足りないのなら、それ以外の力を加えればいい。一番最初に殺しに来た時のように、お前が上から降ってきたように。

わざわざ降りながら体重を乗せた振り下ろしを練習したんだ。何度か死んだが、いい経験値になった。

ズブツ！ と勢いよく目玉に沈んでいくペン。

怪物の身体に巻き付くように身体を動かし、首を足でロックする。

死ね、死ね、死ね、死ね死ね死ね死ね……！

「——死ねよクソがあ!!」

悶えて腕を振り回す怪物に掴まらないように手を回しながら、もう片方の目に手をブチこむ。勿論サイズの俺の手が入りきる訳も無いが、それはそれ。

小指や薬指が押し折れるのも構わずそのまま中に突き刺した。

汚くて喧しい声を上げる怪物の事を無視し、そのまま脳を破壊するために手を奥へと進める。

生暖かいような温いような、そんな気持ち悪い感覚が手を支配するが気にしない。

こんなんで終わると思うな。この程度で終わると思うな。

俺が受けた苦しみはこんなもんじゃない。生きてまま喰われる感覚をお前は知らないだろう。

ペンを離して、手を突っ込んでいる方の目に指を掛ける。

苦しんで、痛みを実感して、そのまま死んでくれ。
無理矢理穴を広げるように力を籠める。

怪物もタガが外れたのか凄まじい力で俺を殴ってくるが、痛み慣れた俺のほうが強い。お前は痛みで反射的に身を竦めるが、俺はそうならない。力が逃げない。

指が骨に負けて痛む。

無理をしてそのまま力を入れた。

「だあああッアッ!!」

一瞬、何かが外れたような気がした。

ガキリ、と頭の中でなった感覚。

——怪物の顔が、二つに割れた。

右目を境目に、上半分と下半分で割った。俺が、割った。

脳も剥き出しに、ピクピクと痙攣して地面に倒れ込んだ怪物に巻き込まれて俺も地面へと倒れた。

手を緩めることは無く、剥き出しになった脳髓に腕を振り下ろす。ぐちゃりと不愉快な感覚。水っぽい、それでいでしたっきりとした硬さを持つ器官だ。でもまだ死んでないかもしれない。だから殺しきる。

ビチャビチャと撒き散らされていく脳髓、いや、脳だったもの。

時々硬い部位を殴っているが気にせず殴り続けた。

そうして殴り続けて、呼吸が続かなくなって止まった時。

怪物の動きは完全に止まり、空を仰ぐように倒れ。

顔が完全に崩壊し肉片の判断すら区別できない程に壊れたソイツは、死を迎えていた。

「……………」

ぐら、と。

馬乗りになっている状態で、息を一つ吐いた。

完全に動かなくなっている怪物を見て少し冷静になれた。俗に言う脳内麻薬ドバドバ、って奴だろうか。ゆっくりと深呼吸をして、血や色んなモノが混ざる合った気持ち悪い臭いがする。

散々俺の事を殺してきたコイツを殺してようやく一つ成した。俺

は前に進んで、殺されるだけの存在じゃ無くなった。今この瞬間ヒエラルキーが格上げされたのだ。

脳を撒き散らし、恨みの全てを押し付けていた存在が死んで抱いた感想。

「……………お前だけ死ぬなよ」

お前は死ぬるのか、と。

俺は終われないのにお前は終われるのかと、思わず愚痴が零れた。

「——え？」

ふと、そんな声が聞こえた気がする。

ついに死に過ぎて幻聴が聞こえ始めたかと思い、一応後ろを振り向いた。

人だ。

こんな怪物とは違う、人間だ。ああ、そういえば俺もこんな形だったか。そうだそうだ、暫く見てなかったから忘れてた。

夢や幻覚だとしても初めて見る人だ。

黒い髪に、顔はよく見えない。右手になんか持っているがそれだけだ。

「……………また、巻き戻るか」

俺の疑念はそれだけだった。

出来ればこのまま前に進みたいモノだ。それにしても腕をやられすぎたが。

願わくば、前に進めますように。

四話

とろん、と。

上質なベッドに身を任せるような、そんな感覚。

何かに包まれている様な過ごしやすさだ。

その静かさに身を任せてゆっくりとしていると、ふと思う。

——ああ、これは夢だ。

そうはつきりと自覚できる。

だって現実には優しくない。どこまでも厳しくて真っ直ぐで、逃げ道が無いんだ。

一度失敗すれば終わりの社会。失敗を容認せず練習を許容しない歯車の一員。そんなつまらないサイクルに身を投じれば最後、もうそこから抜け出せなくなる。

日々の生活が受容するだけのモノに変わり、自分で生産的な行動が出来なくなっていく。

俺はそれが怖くてしようがなかった。

大人は皆、それが正しい事だと言う。

趣味や個人は優先しないのが普通、家庭を持てば幸せ。そうやって皆口を合わせるのだ。

——本当に、それが幸せか？

生物的には正しくて幸せだろう。

雄が雌を孕ませることに興奮を覚えるように、異性と番になるのは絶対的に正しい事だ。

でも、でもそれは社会が未発展の頃の話だ。

社会が発展し、文化が成長した。

そんな時代の中でそれが『絶対』の事なんて、誰が言える。人には人の価値観があつて、それだけ生き方が自由になる。同性を好きになる者も生まれるし、その理由だって説明されているんだ。

それはそれでいいじゃないか。認めればいいじゃないか。

俺は、そう思う。

どこまでも頭ごなしに否定してきた両親に社会の人間。

そのどれもが、俺はどうしようもない程に嫌いだった。



頭が重たい。

思考に霧が掛かったみたいで気持ち悪い。

ぼやけた視界が少しずつ正常に戻って行く感覚を受けながら、深呼吸をする。

息を吐こうとして、僅かに胸が痛んだ。

あの時に比べればマシだ、そう自己暗示しつつゆっくりと息を吸う。

——そうだ、アイツ怪物はどうなった。死んだのか。俺はどうなった？

意識が覚醒する。

視界が目覚め、脳に映る情報が急激に増加した。その負荷が頭痛になって襲いかかって来るのを堪えて身体に力を入れる。

「……………だ……だ……」

俺の記憶にはない。

屋内、だろうか。恐らく木材で造られた壁に地面。俺……というより、人間と同程度の文化を有している場所なのはわかる。窓があつて、扉があつて、そして俺はベッドに寝ている。

起き上がり自分の身体を確認する。

両腕に巻かれた包帯に、捻じ曲がった指。折れていると認識すればピリピリするような痛みが奔る。

この程度で済むなら安いモノだ。

記憶を整理する。

謎の転移に始まり、死んでも死なない生き地獄。自分の周辺に住み着いた白い人間のような怪物連中に弄ばれ喰われ千切られ死にまくった現実。

そしてようやく一体、殺す事に成功した。

なるほど、俺は殺す事に成功した上に生き残ったのか。

欲を言えば無傷なまま生き残ってたかったけれどしようがない。

……今死ねばどうなるのか気になるが、何がどうなっているのかを知りたい。

恐らく俺を治療した奴が居る筈だ。それが人間かどうかはわからんが、危害を加えてくる可能性は低い。

殺すつもりなら治療なんてしない。

もしそうだったらよつぽどのサイコパスだ。

状況は好転した……というか、前に進んだのだろう。それが良いにしろ悪いにしろ、俺が足掻くだけの状態からすこし変化した。

俺だけ終われないという事実がわかってしまった。それがどうしようもないくらいに響く。

コンコンコン、と扉がノックされる。

俺の他に人がいるような環境じゃないしわざわざする必要も無いと思うが律儀な奴だ。

一言だけ言おうかと思いい声を出そうとしたが、それより早く扉が開く。

「よつぽいしよ、と」

そんな声と共に、バケツを両手に持った奴が入ってくる。

黒い髪を後ろで一つ結び——俗に言うポニーテール、だったか。それで軽く纏め、服は俺が着ている様なワイシャツにスカートを身に付けている。

扉を器用に開きながら入って来たその女は鼻歌混じりにこちらを見て——固まった。

「……………え？」

え、はこつちの台詞だが。

ああ、コイツか。どうやら最後に見た人間らしき姿は幻覚じゃなかったらしい。

「世話になったみたいだな」

「え、あつ、えと、はい」

扉の前でバケツ両手に立つ女。

「俺はどれくらいここに居る？」

「えっと、大体二日くらいですね」

二日間意識がない状態だった、か。

そしてこの問答で大分希望が持てるようになった。両腕が折れている人間を診察し治療、更にそのケアまで出来る程に余裕がある。そして、彼女は人間である。というか人間にしか見えない。

「——いや、普通に起きてるんですか!？」

女の声が部屋に響く。

傷に響くからやめて欲しいが、我慢する。今更この程度の痛みはどうでもいい。

「あ、すみません。今お医者さん呼んできますね!」

バケツを置いて外に出ていく女を尻目に、少し情報を整理しようと思つて——止めた。

ベッドから身体を降ろして、少しだけ痛んだ足を無視して歩く。

離れた位置にあつた小窓から外を見る。

家が幾つもある、公園のような場所も見える。子供達は走り回つてるし、大人たちは忙しそうに動いている。

この光景の中にあの怪物は居らず、死の感覚もない。

現代日本とは違うが、紛れもない『人間社会』が形成されていた。

——……ああ、良かった。

絶望しても、折れても、挫けても、精神を保つて良かった。

痛くても耐えて良かった。苦しくても堪えて良かった。辛くても歯を食い縛つて良かった。

涙が、零れる。

どうしようもないくらいに胸が痛い。良かった、良かったと何度も反芻する。

たとえこの後に苦しくて辛い世界が待っていようとも、今この瞬間だけは——良かったと。

安堵の気持ち、胸に刻み込んだ。

「……………うん。呼吸も安定してるし、一先ずは大丈夫かな」

白衣を着る、少しやる気のなさそうな男。

「なんであの状態から普通に生還できるんだ？ アレ、死んでてもおかしくないというか死んでるべき怪我なただけど」

「先生、その言い方は非常によろしくないかと」

あまりにも真つ直ぐ言ってくるモンだから驚いた。これってヤブ医者 of 類じゃなからうかと心配になったが、腕は確かなようだ。少なくとも俺が生存してるからそこに関しては納得した。

隈がこびり付いた目からは疲労が見て取れ、医者本人が体調管理できて無さそうに見える。

その傍らにはさっきの黒髪の女とは別に作業服に身を包んだ女が佇んでいる。

医学の方面に明るくないから名称不明だがまあ助手でいいのだろうか。

「まあ良いか。こんな状況だ、奇跡の一つや二つポンポン起きてくれないと困るね」

医者としては情けない限りだが、と男は薄く笑った。

それに関しては同意する。こんな意味の分からない状況なんだから奇跡くらい簡単に起きて欲しい。

「診察も終わったことだし、時間もある。どうだい？ 僕とおしゃべりでもしようじゃないか」

願っても無い事だ。

確実に俺より先にこの場所へ来て生活に馴染んでいる人物。それも医者という重要なポジションについてる人間から情報を与えてもらえるとは有り難い。

嘘を吐く可能性に関しては、一先ず考えない事にする。

「僕は桑田蓮^{くわたれん}。こっちは暫定助手のスグリさん。年齢不詳でミステリアスな女性さ」

「勝手に属性を付けないでください。……よろしく願います」

マイペースなのか、それともあえてなのか。見知らぬ人間に対する自己紹介で身内ノリを発動する事は一般的にあまり良くないが氣にした様子はない。

「俺は日上八光、日本人だ」

「ああ、だろうね。申し訳ないけれど君の荷物を確認させてもらったよ」

ならば話は早い。

いや、逆に身元が割れているからこんな風に招き入れたのか。こんな異質な場所でこそ發揮された身分証明書の力に内心安堵した。

「僕も日本人だね。多分君も飛ばされたクチだろう?」

僕はこの拠点に飛ばされたけどね、そんな風に桑田は肩を竦めて話す。

「飛ばされた……便宜上転移と呼んでる。君を見つけた彼女もそうだよ?」

「……そうなのか」

つまり不定期でやってくるのか。

誰かに呼ばれているのか、それとも唐突に流れ着いているのか。そこはわかってないだろうがまた一つ情報が増えた。

「さて、何から話すべきか……逆に君の聞きたいことを教えて貰った方が良いかな」

「ここについて知っている事全て」

端的に目的だけ伝える。

俺が知りたい情報はこの場所についてだ。俺の巻き戻り——死ねば戻るのだから『死に戻り』か——はここに来てから発生したモノだ。以前現代日本で死んだことが無いからわからないがその時点で起きたことは無かった。

この死ねない地獄の原因は必ずここにある。

「……君は素手で奴らを殺したと聞く」

少し躊躇うような、これまでの様子とは違う問い。

「正確には器具を使用している。完全に素手で殺したわけじゃない」

「まあそこは良いんだ。僕たちも奴らには手を焼かされていてね、数

だけ増えていくモノだからもうお手上げさ」

肩を竦めておどけるように言う桑田。

軽く絶望できる情報を簡単に出されてしまった。数が増える。数だけは増えていく。元になるモノは一体なんだ？ 単一の生命体として生まれるのか？ 成長過程はどうなっている、まさか生まれた時からその姿な訳がない。

「この拠点で奴らを殺せる人間はそう多くない。さっき話した君と同じ転移者の女の子が居るだろう？」

そう言われて、黒髪の女を思い出す。

「彼女がこの拠点で一番奴らとの戦闘に慣れている。既に二年近く戦っていると聞くよ」

二年——二年間もこの世界で戦っている。

俺がまだ新卒の社会人として働こうとしている頃から命のやり取りを行っている。

「あまりここで説明してもアレだけど、彼女は【奇跡】の一つだと思ってるよ。居なかつたらとつくに拠点は滅んでるさ」

俺のように死に戻りでも保有しているのだろうか？

俺以外の人間がそういう不可思議な状態に陥っていても不思議ではない。何せ死んでも死なないなんて現実がここにあるんだから、何が現実になるか……予想できるわけがない。

「そんなわけで、ぶっちゃけ僕らも情報不足。僕がここに来たのは半年前の事だしねえ」

半年間で得られる情報は、少ない。

暗にそう告げられたがそれを意に介せずにもう一言踏み込んだ。

「——俺は、探してる物がある」

今の俺が求めているモノだ。

とても身近にあるのに、今は手に入らないモノ。どんな物質にも存在している等しい終わり——死、そのもの。終わらない時を終わらせるため。

「謎を知りたい。誰が、どうやって、どんな目的を持って俺たちをここに放り込んだのか。何故人間を喰らうような生物が生まれたのか。

ここは何処なのか、元の場所に帰れるのか。それら全てを俺は知る必要がある」

全部だ。

全部求めて理解すれば必ずそこに辿り着ける筈だ。

俺に死に戻りを付与した奴も、俺を何度も何度も喰らった怪物を作った奴も、この世界そのものにだって近づける。

確証はない。

だが、俺は終わらない。終われないから諦められない。どれだけ諦めても意味が無いから。

「協力してくれ。情報をくれ。俺が代わりに戦おう、あの女の代わりにだってなろう。奇跡を起こせと言うのなら奇跡になる。戦って戦って戦って、殺し尽くした果てを俺は知りたい」

悪意のある転移だった。

悪意のある状況だった。

「——俺が死ぬその時まで、戦い続けると約束する」

文字通り、死ぬまで。

死ぬことが出来るその時までこの命は担保にすぎない。

「……………それ、仮にも医者目の前で言うことかい？」

「あくまで一例だが、それくらい覚悟は持っている」

覚悟を持ったと言うより、持たざるを得なかった。

それを言っても意味が無いことは理解してる。死に戻りしていません、なんて他人に知られるメリットはない。

「俺は優秀じゃないし神様でもない。俺に出来ることは数える程度の事ではないが、それでもやるよ」

「んー……………いや、そうか。うん、こっちとしてもそう言ってくれるなら助かるけどね」

隈が目立つ目を細めながら桑田が話す。

「うん。僕の一存でどうこう言える事じゃないけど会議で伝える、それは約束する。スグリちゃん権利を賭けてもいい」

「勝手に人の権利賭けないでくれますか？　そもそも貴方のじゃないです」

ナチュラル外道なことを言った桑田に対してスグリから即座に断りが入る。仲が良いのか、逆にビジネス的な交友関係だからこうやって好き勝手言い合えるのか。

「僕としては信用したいけどね。あの子が連れてきたんだし」

……あの子、ね。

あの黒髪の女がそれほど戦えるとは、世の中わからないものだ。

「あの大怪我から復活できる生命力の持ち主だ。生きていれば絶対に何か役に立つだろう?」

打算的な考えをオープンに出してくるのは信用して欲しいと思っているからか。

別に不愉快な考え方ではないし、俺もそう思う。

「それじゃあヨロシク、また改めて来るよ。スグリちゃん、この説明してあげて」

「わかりました。ちゃんと診察に行ってくださいね」

「おお、やだやだ。医者 of 僕が診察に行かないなんて、そんなことあるわけないじゃないか!」

そうやって昨日子供達と遊んでましたよね——スグリから放たれた一言で桑田はそそくさと出て行った。

「……日上さん、と呼んでも?」

「好きにしてくれ」

「では日上さん。差し支えなければ教えてくださいが、どうなさいますか?」
情報共有は早ければ早い方が良い。

手早く頭の中に叩き込む。呑み込みが早い人間じゃないがそこは仕方ない。何度か聞くしかないだろう。

「頼む、あー………なんと呼べば?」

俺が問うと、少しだけ目元を動かすスグリ。

「……お好きにどうぞ」

「じゃあスグリさん。よろしくな」

社会の歯車にもう一度組み込まれる。

まあ、なんだ。元の場所ですべての事と変わらない。ただ一つ重要なのは、ただ受容するだけの生き方では何も進まないと言う事だ。

自分で考えて、自分で未来を考えて、自分で世界を変える覚悟を持つ。

そんな御伽噺みたいな現状だが——やるだけやる。
それしかもう、俺に道はない。

五話

「……………ちよつと、動かしてもらえるかい？」
手を開き、閉じる。

指を一本ずつ動かしてそこに痛みが生じないのを確認し、問題ない事を伝えた。

「ン~~~~……………」

桑田は何か不満そうな、というより納得いかない表情で腕を組んで唸っている。

まあ、それはそうか。医者としてある程度勉強してきた人間からすれば、今の俺の身体は少し異常らしい。

なにせ、折れた指が三日で治るのだ。

これを異常と言わず何を異常と言うんだ？

「……………再生が早すぎる。原理がわからない。人間の身体にそんな機能が付いてるか？ 飛ばされる前の世界に違いがあるのか？ 少なくとも同事例はここで発生してない。サンプルが少なすぎるし設備も足りない。個人、日くん単体としての性能が……………」

「先生、患者の前ですよ」

「うおつと、これは失敬。つい癖でね」

そう言いながらバインダーに留めた紙に書き込んでいく桑田。

貴重な資源ではあるが使わない理由はない。紙は数が限られているが故に、基本的に責任者クラスが使用の権限を有していると説明を受けた。

そんなポンポン使っているのだろうか。

「ああ、スグリちゃんに言われたのかい？ いいんだよ、なにせ僕は責任者だからね。体調管理に土の板なんて使えないだろう？」

「紙は貴重です。先月流れ着いた人間が大量の紙を有していたからいいものの、このペースだと二カ月後には無くなりますよ」

「文化と文明は使ってこそさ。限りがあるからと言って最後の一枚をずっと補完する訳にもいかないさ」

これまた滅茶苦茶な短さまで削られた鉛筆を使って書く桑田。

物資に限りはあるが、それでも躊躇う事はしない。思い切りがいいのか後先考えてないのか……。

「——こんなものかな、うん」

情報を書き込み終わったのか、桑田がバインダーをスグリに渡す。

「正直医者としてはあまり信じたくないんだけど、実際治ってるからしようがない。後で彼女に連絡するよ」

「実戦か」

「気が早いね。多分そこまで急がなくてもいいと思うよ？」

とは言うものの、俺にはそれしかない。

あの怪物を殺していくしか、それ以外に出来る事が無いんだ。他人の病気を肩代わりも出来ないし食料を作ることも出来ないからな。

「ハハハ、全くここは働き甲斐がある場所だなあ」

「先生、全体会議まであと一時間程です。レポートの作成はなさいましたか？」

「……………スグリちゃん。僕はね、デジタルな人間なんだ。アナログじゃあないんだ。学生の頃の感想文とか死ぬほど嫌いだったしパソコンを手に入れてからは技術革新でも起きたのかと見間違える程に生きて行くのが楽しくなった。僕はこうやって鉛筆でモノを書くタイプじゃないんだな、これが」

「いいから早く作ってください。また怒られますよ」

パソコンが恋しいよ……と言いながら退出する桑田を見送って、改めて自分の調子を確かめる。

ぎゅ、と拳を握り込んでも痛みはない。

いつの間にか、あの時味わった幻痛が消えている。腕を喰われた感触、足を喰われた感触、腹を開かれた感触、臓物を目の前で弄ばれた感触。

その全てが残っているのに、痛みはない。

どうにも気持ちが悪くて、顔を顰めた。

「何か、言っていない事ありませんか？」

スグリが話しかけてくる。

俺が戦いたいから虚偽申告をしていると疑っているのだろうか。

その気持ちはよくわかる。

普通は治らない速度で怪我を治し、尚且つきつきと戦わせると言っている。

まあ疑うよな。これで俺が完治していなかったら責任は桑田に飛ぶ。つまりスグリの上司の責任にされるわけだ。

「ない。嘘偽りなく完治してよ」

そうだ。

治ってることは嘘じゃない。

痛みもなく、折れた指や怪我は完全に治っている。ただ純粹に話してない事があるだけだ。

「……そうですか。ならいいんです」

——三日間スグリや桑田と過ごしてわかったのは、互いに信頼し合っているという事だ。

辛辣なように見えてその実とても心配性なスグリに、ぶっきらぼうで適当に見えて誠実な桑田。一朝一夕で形成される信頼関係じゃないのはすぐわかった。

あの薄っぺらい、金ですら繋ぎ留めてない適当な人間関係しか築いてこなかった俺には眩しい。

生き残る為なら俺も、そうなれるのだろうか。

「……………」

少し、羨ましく思った。

◇

「——と言う訳でお連れしました。これから戦闘要員の一人になる日上さんです」

「日上八光だ。好きに呼んでくれて構わない」

集められた男女数人の前で取り敢えず自己紹介する。

軽く見た感じ鍛えられてそうな身体つき、体格差、そういうモノを考慮して戦えそうに見える人員だ。

「治ったんですね、怪我」

「お陰様で。名前を聞いてもいいか?」

俺の事を見つけてくれた件の女も居た。

世話もしてくれてたみたいだし、礼儀は尽くすべきだろう。

「水木雪菜みずきゆきなです。これからよろしくお願いします!」

よろしく、と言いながら握手をする。

小さい手だ。俺よりもよっぽど小さい手。これであの怪物を殺せるのか。

「では、私はこれで」

「あ、もう行っちゃうんですか?」

「また今度、ね?」

そう言っただけのまま歩いて行くスグリ。

意外だった。

あんな風に笑うんだな。

「……相変わらず美人だなー、スグリさん」

「ばっかお前、俺達に向けた笑顔じゃねえよ」

「わかつとるわ! 美人を美人と言って何が悪い!」

わいわい騒ぐ男性陣。

ああ、意外と和気藹々としてるんだな。

もつとこう、異世界なんて殺伐としてるもんだと思ってた。

「あはは、騒がしくてごめんさい。こういう感じなんですよ」

「……いや」

仲間、か。

命を賭けて、賭けられる信頼関係。そんな物とは無縁だったから新鮮に感じる。

「いいものだと思う」

素直にそう思うんだ。

こういう状況になっても諦めることなく前向きに立ち向かうその精神が。すぐ諦めてしまふ俺とは違って、希望に満ち溢れている心が。

まあ、今も諦める為に生きている。そんな俺からしたら、羨ましく

て眩しい事この上ないよ。

「……ふふ、良かったです」

ニコリと笑う水木。

身長の関係上どうしても俺を見上げる形になり上目遣いのようになる。

「はー、水木ちゃんのガチ笑顔ありがたや」

「私が普段作り笑いしてるみたいない方やめてくれませんか!？」

……中々濃い連中だが、馴染めるだろうか。

ちよつと自信が無くなってきた。俺も、こういう関係に憧れてたのかな。遠慮なく冗談を言い合えて、一緒に何かに打ち込める友人とか。

なんてセンチメンタルに考えてみたが俺自身がつまらん奴だから出来なかったただけだな。

「おい、慣れ合うのもいいが先にやることがあるだろ」

若干ツンケンした口調で話しかけられる。

視線を向ければ仏頂面で腕を組んで仁王立ちする男。俺と同じくらいの身長で髪色は茶色、少し長めに切り揃え襟足を何かで縛っている。

「話には聞いたが素手で連中を殺したんだろ。なら、武器をどうするかだ」

武器、か。

正直考えても居なかった。目とか関節部に捻じ込めるなら何でもいいし、力だけで顔を割れたから何とかなる気もする。だが、十全に備えて悪いことは無い。寧ろいい。準備はするだけ得をするのだ。

個人的な望みとしては、俺の力を要さずに殺せる武器が欲しい。

「……毘か？」

その旨を伝えると少しズレた回答が返って来た。

毘とかそういうのじゃなく、なんというか……鈍器？　かな。

連中を複数相手していて理解したが、個体差が存在する。

姿形が一致している奴の方が少なく逆にバラバラだ。つまり俺達人間と同様に体格差が存在し、強度が変わる。

その個体差の微妙なラインをねじ伏せられる武器が欲しい。頭を砕けば死ぬ事は証明済みだから、頭を一撃で砕ける強い鈍器が。

「合理的だな。だがそれは一対一の場合だ」

複数に遭遇したのなら一匹ずつ殺せばいい。

今の俺にはそれが出来る。一体の頭を砕いて、次の選択肢を見て、その先に行く。言ってしまうえば死に戻りによる強制的な先読みだ。

出来るから今ここにいる。それじゃ納得できないか？

「……………まあ、いい。足手纏いにさえならなければな」

そう言つて目を閉じる男。

どうやら既に戦力の中に俺は組み込まれているようだ。確かに一体殺しはしたが、殺している風景を見た訳でもないのによくもまあ信用できる。

……………いや、信用している訳では無いな。ただ純粹に殺したという事実のみ見ているだけか。

「そういえば今日の見回りつてホオツキくんですよな」

「そうだが」

俺に質問をしてきた男——ホオツキと言うのか。

水木が少し近寄つて、周りに聞こえない程度の声で話している。若干ホオツキが苛立った様子を見せているが何を話しているんだか。

「……………俺が？　なんでそこまでする必要がある」

「いいじゃないですか。きっと納得できると思いますよ？」

少しの間話し合った後、不機嫌そうに顔を顰めるホオツキとニコニコ笑う水木。

「日上さん、いきなりで申し訳ないんですけど今日の見回りから付いて行つてもらつてもいいですか？」

さっきの会話から察するにホオツキと二人でか。

俺は構わないがそいつはいいののか？

「一人くらい増えた所で問題ない。お前も少しは考えておけよ」

「わかった。よろしく頼む、ホオツキ」

「……………フン」

さっきのノリで和氣藹々とやれるメンバーもいれば、そうではない

奴もいる。

それはそうか。俺達は人間で個人差があり性格の差もある。全員統一されているなんて気持ちが悪い。

「じゃあ武器も取りに行きましようか。武器と呼べるほど上等じゃ無いんですけどね」

水木に手を引かれその場から立ち去る。

いいのか？ 打ち合わせとかしなくて。

「大丈夫です！ 後で一度集まりますから」

ならいい。

武器、武器か。ハンマーとかそういう系統になるのだろうか。メイ、名前はわかる。詳しい形状はわからん。振るうための筋力が足りてるのかも不明。

でもまあ、その内慣れるだろう。振って、振って振って振って振るとにかく数を重ねればマシンになる。

今もそうやって生きているんだから。

そうして歩いて一分ほど。

ちよつとした倉庫の中に武器を収納しているらしく、扉には鍵が掛かっている。よくこの環境で鍵なんて作れたなと思ったが、どうやらかなり簡単な形状で造ったらしい。

中を覗けば、ごちやつと整理されないまま放置されてる道具が沢山転がっている。

これだけで相当数の試行回数を重ねているのが理解できるし、少しでもマシなモノを作ろうとしていたのが見て取れた。

「ちよつと前まで居た人がかなり優秀で、鉱石を探して来て自分で造っちゃうような人だったんです」

居た人、という事は既に居ないという事か。

言い方的に死んだんだろうな。連中に遭遇でもしたのか、自分で探索に行つて帰つてこれるような人材がミスをするとは思えない。運が悪かったのだろう。

「さっき言っていたような武器なら……これとかどうですか？」

ズシツと、少し重そうに持ち上げる。

先端に少し鋭利に加工された鉄の塊が付いている棒だ。もつとわかりやすく言うなら、ハンマーと呼ばばいいのだろうか。素人目にはハンマーにしか見えないからハンマーで良い。

水木から渡してもらい、握る。

持った感じはしつくりくる。違和感もそんなに無いし、振るう事が出来るなら十分に威力を発揮するだろう。ただそこまで重く感じないのが気になるな。この位の軽さで大丈夫なのだろうか。

「え、軽い……ですか？」

それを伝えると少し考えるような仕草をされた。

男と女、その差かもしれない。

いくら水木が戦えると言ったところでどうしても差が発生してしまう。男と女では埋める事の出来ない差が存在する。

同じ男でも体格によつて変わるんだ、しようがない。

「うーん、それより重たいのは多分……」

その言い方で何となく理解した。

ここの管理をしている水木が薦めてきた武器だ。多分これ以上俺に適してそうなモノは無かつたんだろう。

「試しに振ってみましょうか。たしか……ここら辺に……」

ガサゴソ何かを探し出したので、俺も少し協力する。

大方巻藁とかそういうものだろう。武器を作るのに試すモノを作らないとは思えん。

「ありましたー！」

えへへと言いなながら巻藁を持ち上げる水木。

それをそのまま外に持っていったのでついて行く。

「よい……しよつとー！」

ドスンと地面に無造作に置かれた巻藁。

試してもいいか確認すると頷いた。

両手で持つ。

振り方なんて知らないから、とりあえず相手を破壊できる力を籠める。

上段に振り上げて、そのまま振り下ろす。

インパクトなんてわからん。とにかくアイツを殺す。あの真っ白な怪物を殺す。

ぞわ、と。俺の身体中を貪ったあの感覚。

アレを思い出せ。あの不快感を刻み込め。

恨みを重ねよう、痛みを連ねよう。自然と手に籠める力が増していき握り手がギリギリと音を鳴らす。

——死ね。

純粹な想いだ。

俺がこの鈍器に籠める想いと力はそれだけでいい。

「……………いいな」

いい。

この武器は、ちょうどいい。

きつと殺せる。間違いなく殺せる。

巻藁を貫通し陥没した地面を見て、俺はその確信を抱いた。

六話

「――来たか」

腕を組み、待っていたであろうホオツキに声をかける。

「……ソレにしたのか」

ああ。

武術も知らないし、武器の振るい方なんて知らない素人だからな。ただ力を籠めて振るうだけで敵を殺せる武器が一番良かった。

武器――ハンマーと呼ぶことにしよう。

よく漫画やゲームの中では背負ったりしてるが、あの原理はどうやってるのだろうか。出来たら便利なんだが、生憎この世界じゃそんな不思議能力は無い。

今も不便極まりないが手でもって歩いている。

腰に付けるには長すぎるんだよ。

「まあいい。森の中で振るえるのか?」

狭い空間で正しく威力を発揮できるかどうかは、わからん。

外で十分に力を籠めるには問題なかった。

「……水木」

「恐らく問題ないですよー!」

明るい水木の返答。

俺の何を信用してるのかわからんが、コイツから謎の評価を受けている。不気味とまではいかないが、疑問ではある。一体俺の何を気に入ったのだろうか。そんなに付き合っても長くなく、ファーストコンタクトは俺がああ怪物の頭を叩き潰してる場面だろう。

「……フン。お前がそういうなら問題ないだろう」

そう言っつて小屋の中に入って行くホオツキ。

隣の水木を一度見て、そのまま俺も付いて行く。軽く感謝でもしておけばよかっただろうか、だがこれが別れなわけではない。また会ったときにでも言えればいいか。

小屋の中は簡素な造りになっており、箆筒にも似た家具が幾つか。中央に机が置いてある。

机の上に広げられた地図のようなモノを手にとって、ホオヅキが話し出した。

「この説明は？」

ある程度は受けた。

周囲を囲う木で出来た壁の中、周囲は森。まだその全貌は掴めてない。

「その通りだ。未だにあの怪物共の生息地域も生態系も解明できていないし、いつどこから沸くのかもわかってない」

この世界じゃ異物は俺達の方なんだろう。

元々生息していたのは向こうで、俺達がやってきただけ。ここが地球かどうかもわからないのに人類の起源なんて知っても何にもならないが、気休めにはなる。

「お前は、転移してきたんだらう？　ここじゃない何処から」

ああ、そうだ。

自然何てモノは薄くなり、人類が支配する世界。天敵と呼ばれる生命体すら管理して、自分たちの支配下に置いていた。こことは大違いで安心安全な世界だったよ。

「……そうか」

——この拠点には、二つの人類が存在する。

水木や桑田、俺のようにある日何処からか『転移してきた存在』。転移組なんて呼ばれ方をしているらしく、苗字があるのがその象徴。

逆に苗字がなく名前だけ——スグリやホオヅキはこの拠点で生まれ育った組だ。

身体的特徴に差はない。

差が無いからこそ逆におかしいと言える、そんな風に桑田が語っていた。

生命体の姿は歴史を表す。

全く同じ言語、全く同じ姿、全く同じ種族。

そんな奇跡がある訳はない。この集落の人間も俺達も、元は同じだ。何十何百、それ以上前かもわからないが。

「まあ、いい。肝心の見回りの話だが」

思考を切り替える。

無駄な雑な事を考える癖は相変わらず残っている。俺の悪い所で凡人たる所以でもあるが、死ぬ直前もそうやってうだうだ考えていたのに変わらないものだ。

「壁の外側から点検を行う。それくらいだ」

……それだけか？

もっとアイツらを探したりとかは。

「それは——」

そこまで話して、唐突に言葉が途切れた。

小屋の壁を突き破って、突如として現れた白い何か。

四足歩行で歪に発達した手足に、顔面に目は存在せずに口そのもの。気持ちが悪く、得体の知れないその存在は俺へと突撃してくる。何故だ？

周囲の音はある程度拾っていたがそんな音聞こえなかった。どうして現れた？

既に俺が間に合う範囲じゃない。確実に命を獲られる距離間、今回は諦めた。だが考えなければ、この僅かな間に。

木の壁を越えて、建物をぶち破って俺だけを狙ってきた。

確実に俺を狙う理由が存在する。それを考えろ、そして対策を取る。巻き戻れるのが、どの地点までだ。わからない。

初めからじゃ無ければいい。

俺に飛び掛かって、そのまま大きな口を広げて——激痛と共に視界が暗くなった。

目の前にあるホオヅキの顔。

そして見覚えのある小屋。地図を持って説明している場面で間違いない。

どうしてここが巻き戻り範囲になっているかは不明だが、利用しない手はない。

——即座にハンマーを構えて、その方向へと思い切り振りかぶる。
「おい、お前なにやって——」

瞬間、小屋をぶち抜いて突撃してくる白い怪物。
狙いを定めて、振り下ろす。

まさか先制で攻撃されると思わなかったのか、そのまま俺を喰らった口そのものと言える頭部を叩き潰す。

少し甘く入った一撃、まだピクピク動いているソイツに対して追撃を入れる。

一発入れて、大きく痙攣した。

二発入れて、胸が陥没した。

三発目、骨が砕けた。

四発目、腕が千切れ飛んだ。

五発目六発目七発目、白い肉片が周囲に飛び散って赤い液体が俺にかかった。

八発目を打ち込もうとして、もう動いてない事を認識した。

「……………いいな」

凄く好い。

しつくりくる。

殺した。殺したという実感が、感触が、ダイレクトに染み渡る。

俺を散々食ったこの化け物を俺は意図も容易く殺せるようになったんだ。

なあ、クソ野郎。

どんな気持ちだ。どんな痛みだ？ お前らはいいいよな、死ぬるんだから。

さつき喰われた痛みが抜けてない。

人の頭を喰っておきながら、それで終わりかよ。首が痛え、ジンジン痛む。それでいて突き刺さるような抜けるような痛みだよ。

本当腹立たしいな、お前らは。

……落ち着こう。

吸って吐いて、血液の香りが充満したこの場は不愉快この上ないが仕方ない。

「……次は」

一匹だけで来る訳がない。

俺を追って来たにしろ、必ず複数体いる。お前らはそういう姑息さも持つてるだろ？

そこに関しては信用してるんだ。

小屋の外に出て、少し周りを見る。

既に水木の姿も無く、今の音を聞いて周りの人間が見に来たくらいだ。

「——おい、大丈夫なのか!？」

そう言いながらホオヅキも外へと出てくる。

俺は大丈夫だが他の連中はどうなってる。

一匹だけか？ これまで侵入してきたことは？ その際は何匹で、

どういう目的で襲来した？

それを理解しなければいけない。

今すぐに。

「……………お前も……………」

何かしらホオヅキが呟いたが、その声が小さすぎて聞こえなかった。

顔に飛び散った血を指で拭ってから改めて侵入してきたであろう方向へと足を進める。人間の手が入っているとはいえ雑草は生えている。その上を踏み倒して歩いて来たのだろう、大きな足跡がくつきり残っていた。

木の壁を破壊してきたわけでは無さそうだ。乗り越える位は平然とやるだろう。

そうやって足を進めている最中に、唐突に後ろから押される様な感覚。

何とか踏みとどまったがその力が衰えることは無く、抵抗するようにして足に改めて力を籠めようと思いい下を見て——驚いた。

腹から赤く染まった手のようなモノが突き出ていた。

無論俺の身体を貫通した。

後ろを振り向けば、頭部を失った先程の怪物。

ああ、クソ。死んでなかったか。

いや、死んだのか？ 復活でもしたのか。痛みで思考が上手く纏まらないがそこは仕方ない。

どうせ巻き戻る。

引き抜かれた傷痕——というより、最早穴。

血が噴き出るように流れ出て、臓物が溢れていくのを目で捉えた。

わかった。

今度はお前が死に切るまで殺してやる。

怪物の振りかぶった腕で頭を千切られて、死んだ。

再度ハンマーを振りかぶって、備える。

もうホオヅキの事は無視してアイツだけを見る。

壁を突き破って怪物が来る。

それに対してハンマーを振り下ろす。

ここまではさつきと一緒だ。問題はここから。

頭を一発で潰して、今度は胴体。

数発かけて胴体を潰してから手足を潰す。決して起き上がれることがないように、二度と再起できないように。お前は終われるんだから終わっておけ。

死ぬることは知っている。

だから死ぬ。

白と赤が混ざり合って鮮やかな色に変貌し、小屋内に血肉が飛び散った。

臓物も引き摺りだした。もう二度と動けないように、物理的に動く手段を封じる。もう元の形は留めていないが念のためだ。

そうして挽肉よりも粗く、それでいて細かく磨り潰した。

ハンマーにこびり付いた肉片が気持ち悪い。

ピクピクと痙攣する様な、そんな動きだ。気持ち悪かったからそれも地面に叩き落として、踏み潰した。

「……………」

ああ、これで死んだらうか。

頭を潰しただけで死ななかつた理由はなんだろう。脳があるのは理解しているが、もしかして脳の位置が違ったのか？ 普通に考えて既存の生物の枠組みを超えている。やはり何かあるな。

晴れやかな気分だ。

俺は死んでも死ねない。苦しみしか感じないと思っていたが、こういう楽しみもあると思えば少しは楽になった。

一方的に相手を殺せる。

それはとてつもない快感だ。

生物として持つていい感情か、それとも——そんな事はどうでもいい。

元より決めた事だ。

俺が生きる理由は何時か死ぬため。

終わりを求めて生きている。

この怪物を殺せば終わりに辿り着けるなら、喜んで殺そう。

「——おい」

ホオヅキが話しかけてくる。

ゆっくり振り向けば、俺から距離を僅かに取る。なんだよ傷つくな。

「…………お前は」

何かを問おうとして、そのまま口を閉じた。

無意識に腹を摩っていた。

先程貫かれた痛みがまだ残ってる。脳が痛みを知覚してるって事は、それは現実起きた事象なのだろうか。そうじゃなきゃ説明がつかない気もするが、強烈なイメージを持つていれば現実のように誤認する事も出来るらしい。

実際に死んでいるかどうか何てどうでもいい事だが。

首も痛い。

喰われても死なないからいいが、出来るだけ避けたいな。痛いのは嫌いなんだ。

担ぐようにしてハンマーを支えてから、ゆっくりともはや肉の塊とすら言えなくなつた怪物を見る。

臍物はぐちやぐちやに叩き潰されて、直前に喰つてたであろう生き物の骨も出てきた。

これは研究に使えるかな。現代日本だったら使えると思うが、今のこの世界じゃどうだか。多分最先端の科学を保有するのが桑田個人だろう。

俺を狙つてきた理由も気になる。

パツと思いつくのは敵討ち。俺が引き千切つて叩き殺したアイツと関係を持った、とか。

人間に似た独自のコミュニティを持つのは既に理解してる。

そういう点で襲撃してきた——いや、何か違うな。

わからない、か。

俺一人じゃやはり何も出来ない。一緒に考えてくれる優秀な人間が欲しい。

「——え、わわ、一体何が……つてうわ!?!」

小屋の開いた穴から水木が入ってきて、そのまま小屋内部の惨状を見て叫ぶ。

散々見飽きてるだろ、お前みたいにずっと戦ってる奴は。

「う、うわあ……いや、私はこれで斬るので」

ああ、そんなに周りに散らばらないのか。

汚くなるのも別にいいんだが、そっちの方が確実に殺せるのか？

「うーん、そうでもないですね。偶に頭部飛ばしても死ななかつたりするので」

結構いるのか。

今回の奴もそのパターンだった。頭を潰しても生きてたよ。

「よく対応できましたね。あ、ホオヅキくんも大丈夫ですか?」

声をかけられたホオヅキは、俯いたまま。

「……何なんだ、お前は」

極めて小さな一言を呟いた後、小屋から退出していった。

まだ見回りの事とか全部聞いてないんだが。

「…………ちよつと間違つちやつたな」
困つたように笑う水木。
俺には二人の感情がわからないまま、時が過ぎた。

七話

——怖い。

常々感じている。

ずっと怖いと思ってる。

真っ直ぐに生きるのも、逸れて生きるのも怖い。

誰かにそれを指摘されるのも嫌だ。俺は俺の人生を、誰に妨害されることも無く生きていたかった。

だからアイツらが嫌いだ。羨ましい

どこまでも真っ直ぐで強烈で苛烈で、まるで俺が矮小な存在だと知らしめて来るようで。



「はい、皆さん頑張ってくださいねー」

「幾ら応援されてもこれは嫌なんだが」

「でもなあ、いや、しかし、いや……」

水木が呼んできた連中、陽気な戦闘組とでも名付けようか。

そいつらが滅茶苦茶顔を顰めながら小屋の掃除をしている。勿論俺も手伝っているし、何なら俺が一番汚い部分を掃除している。具体的に言うなら床板をぶち抜いて染み込んだ血肉を只管拾ってる。

たまにピクピク動く部位があると気持ち悪くてその都度握り潰してる。

「うえ、アイツまた潰してる」

「やっぱちよっと外れてるよな」

「でも強いしな……」

何か言われてるような気もするが、まあどうでもいい。

そうして手伝ってもらって漸く綺麗になった小屋。ただし穴は直してないので風が入り放題なのがちよっとネックだ。

「これは後で桑田さんに渡しておきます。多分有意義に使ってくれるでしょう」

また仕事が増えたと嫌な顔をする桑田が目には浮かぶ。

まあ、悪いな。

「——さて。じゃあ会議に今回の件を提出する必要があるものでちよつと情報を纏めたいと思います。本当ならホオツキくんにも居て欲しかったんですが、ちよつと地雷踏んだので居なくなっちゃいました」

「まあしようがない」

「切り替えていこー」

陽気な戦闘組が賑やかして言う。
ホオツキが気難しい奴という印象はあったが、相当に面倒な過去があるらしい。

俺はそんな過去は無いから大変だなという他人視点での気持ちしか抱く事が出来ない。しようがない。

「まず簡単に壁の方を見てきましたが壊れてる形跡はなし、尚且つ地下から潜つて来た訳でもなく普通に乗り越えてきたようです」
壁を過去乗り越えられたことは何度ある？

足跡があるのは確認しているが、それをここから動いてない俺が言うのは怪しい……というより辻褄が合わないので黙っておく。

「それが無いんですよ。少なくとも私が来てから二年以上起きてないです」

初めて起きた、か。

これは俺の立場がマズイ事になるか？

「うーん、どうでしょう。桑田さんとかはかなり現実的なラインでの話しか出してこないのが大丈夫だと思いますが、他がどうなるか」

戦う力を持たない生産部、とか。

そこと繋がりが無いから出ていけと言われてしまえば俺は出ていくしかなくなるな。

「日上さんを追ってきたわけでは無い——って断言できればいいんですけど、正直言い逃れできないんですよね」

外に居る誰を襲う訳でもなく、わざわざ建物の中に居る俺を狙って

やってきた。どういう方法で探していたのかは不明だが俺個人を追い続ける追尾機能があることが明らかになってしまった以上、同じ場所に留まり続けなければいつか手遅れになる。

「……寧ろ、ここまで維持出来たことが異常なんですかね」

囁くように水木が呟いた。

何年間もあの怪物がたまたま来なかった。その均衡が俺によって破られた。

事実を並べればそれだけだ。

その原因である俺が言っても説得力は無いがな。

居なければ怪物が来ることは無かったかもしれない。けどいずれ来たかもしれない。それは意味の無い「たられば」——可能性の話だ。

「まあ、それはさておき。私としては追い出す必要性を感じませんし、チャンスだとすら思ってます」

……その心は？

「滅ぶかこのまま一生停滞するかの二択しかありません。——でも、日上さんならそれ以外を選べる」

何故そう思う。

俺をそこまで評価する理由はなんだ？

そう言うと、水木は少し困った顔で笑った。

「……それは、秘密です」

「……そうか」

教える気が無いなら、いい。

別に知らなければいけない訳でもないからな。

「私はここで終わる気はありません。絶対に死んでなんかやりませんよ」

そう宣言する水木の瞳は、とても強い光が宿っていた。

思わず魅せられるような圧倒的な煌めき。

ギラギラともキラキラとも表現できるような鮮やかな光だった。

「だから、絶対に逆らいます。あなたは、私にとって必要な人なんです」

……こんなに熱烈に必要とされた事はあつただろうか。
俺の過去をどれだけ振り返つてもそんなことは無かつた。
俺はどうでもいい人間だ。

才能もない、特別な何かも持ってない。つまらない人間で、いつだつて世界の最先端を行く人間を羨んでいた。

誰かに注目される人間が羨ましかつた。

誰かを惹きつけられる人間が羨ましかつた。

特別な人間に、憧れていた。

「……もし駄目だつたら、二人で逃げましようか？」
また困つたように笑う水木に、何も言えなかつた。

水木が立ち去り、陽気な三人組も居なくなつた。

少しずつつ日が暮れて茜色に染まりつつある空。どういう原理かは謎だが、そういう事実がある。

呆けたように座り込んで考える。

水木の目的——ここで終わるつもりはない。

ここがどこを指すのか不明だが、俺も同意見ではある。

元の世界に帰れるかどうかはどうでもいい。あの世界に価値はもう無い。

求めているのは『終わり』。

俺と言う生命体が死を完全に迎える、それを目指して生きている。死ぬために生きているのは矛盾しているかもしれないが、生物なんてそんなものだ。

水木がこんな退廃的な事を求めるとは思わないから、普通に目指してるモノがあるんだろう。それを手に入れるために俺を利用するのは歓迎するし、俺も共通して歩ける奴が居るなら助かる。

何故なら、優秀だから。

俺とは比べ物にならない優秀さだ。

生身である怪物と渡り合える強者でありながら、前を向いている。前を向き続ける心を持っている。

諦めない——不撓、と表現しよう。

そんな強いヤツが俺と一緒に終わりを探してくれるなら、なんて心強いのか。

「……………一緒に、か」

心の底から何かを目指したことはあっただろうか。

誰かと目的を共有したことは？

無いわけでは無い。ただ、それは仕事だった。

金のためにやっただけで、別に心の底からやりたかったわけじゃない。金を得られるなら何でも良かったんだ。

今はそんな風に生きる必要はない。

それ以外の生き方も知らないのに。

そう考えると惨めで、自分が如何につまらない人間なのかを実感する。

転移して、適当にぶらついて死ぬ事を期待して、死ななくて狂って。

狂っても死なないから意味が無くてこうやって生きている。

こうやって無意味な事を考える癖も抜けてない。

駄目だな、切り替えよう。

一人になると無駄に色々考えてしまう。そんな事をしてても意味はないのに。

それならば少しでも早く殺せるように素振りでもした方がマシだ。

そう思いハンマーを手にとって、血に染まってるのを思い出した。

流星に水場を使おうにも汚染しそうで嫌だしどうやって拭き取ろうか。

資源は限られてる。紙を使い放題だった現代とは大違いだ。

ぐりぐりと地面に擦り付けて汚れを取る。

こうやって汚れた血肉でも役に立つ。

地球と同じならこれを主食にする虫が居て、それを更に利用する微生物なんかも居るはずだ。居ないという事はないだろう。

ここまで地球に似た環境で一気になるとは考えにくい。

ゆっくり息を吸ってから、吐き出す。

変わるべきか？

いや、そんな筈はない。俺は変わる意味はない。

例えるなら新生活——高校へ進学、大学へ進学、就職して社会に出る。そういつた節目に変わっていくモノではあるが、今の状況はそのどれとも違う。

一つだけでいい。

喰われた痛みを忘れるな。弄ばれた事を忘れるな。

復讐と終活、それを求めるだけの人生だ。